

すべて、これ、僕の勝手な妄想なのだろうか。

僕は、その時、この世の中、すべての時間を越えて、すべてを知りつくし、過去も未来も現在も、その手におさめる、全知全能の神の前に出て、その裁きの前に立った思いであった。僕は、目の前に君臨する神に、聞きたくなかった。

神よ、はるか時の流れを隔てて、

それぞれ、この僕の脳裏に刻まれた三つの記憶、幼女、少女、そして今、僕の目前に見るこの女性は、本当は、全くの別人なのか。

僕には、その三人が全くの別人には思えなかった。

僕には、なぜか、神が遠くで、かすかに笑う声が、聞こえる様感じた。

「これは、神のいたずらか。」

僕は、いつも、神を信じないとか言っているくせに、いつの間にか、一人、神に向かって、話しかけていたのだった。

僕は、彼女の姿を、うつろな表情で、ずっと、見ていたが、次第に、自分に戻り、目の前で、彼女が、僕を、じっと、見続けているのに、気がついた。

その時の、僕の心の中の動きを、

目の前にいる彼女は知るよしもなかった。

僕は、その時、口から出任せに、真面目な顔で、

「昔、ちっちゃい頃、会ったことあるよ。」と言った。

彼女は一瞬、ニコツとしてが、不思議そうに、首をかしげた。

僕は後悔していない